

入居者インタビュー

平成2年にご入居された高峰靖子さん（85歳）にお話を伺いました。



今回お話を伺った
高峰靖子さん
「思い出の泰山木の前で」

一家を支え尽くした末に出会ったゆうゆうの里

高峰さんの入居は、約20年前66歳の時。38年間勤務した下関の地元の電子機器メーカーを退職してまもなくの入居です。高峰さんは20歳の時に、ご家族と一緒に満州から引き揚げてきました。波乱に満ちた人生の始まりです。引き揚げは大変つらい体験でした。それまで築きあげた財産はすべて没収され、ゼロからのスタートになったのです。「父はショックから腑抜けになり、私が、両親と6人姉妹の大家族の生計を支えることになりました。とにかく仕事を一生懸命してきましたわ。」と。淡々としたお話ですが、大変な頑張りだったと想像します。毎日仕事に明け暮れる中で、「仕事だけの人生で終わりがたくない」という気持ちが芽生え、その気持ちが日増しに強くなっていくのを感じたそうです。そしてお母様が亡くなり、退職前にお父様も見送ることになりました。肩の荷が下りると同時

に「自分の残り時間を充実して生きたい」と切実に思ったそうです。当時はマンションに一人暮らし。倒れて不安になった時、ゆうゆうの冊子に巡り合いました。駅前という立地条件が気に入って、「百貨店にホテル、体育館もあつて、都会だなあ・・・ここなら自分が寂しくならないだろう」と、入居を決めました。

旅と人との出会いが私の人生

在職中から数えて今まで行った旅行は数知れず、「特に海外旅行は、空港に着いたその瞬間が好き。その土地の食べ物を食べ、その土地の人々と交流するのが楽しみ」とのこと。「パリ・ロンドンなど有名観光地にも行きましたが、むしろ、私は人が行かない所に関心があり、そういう仲間が自然と集まりました。一緒にレバノン、ギアナ高地・パタゴニア横断などをしたのが忘れられない思い出です。すべて、私の旺盛な好奇心のなせる業」と高峰さん。旅のエピソードを沢山うかがいました。

「旅先では、必ず市場やマーケットをのぞいてみたくなる。リマソール（東地中海・キプロス共和国の都市）の路上では花・果物・魚介類も売って店が並んでいました。その路上のパン屋さんと友達にな



リマソールのシャイなパン屋さん

り、『写真を写してほしい』と頼まれ送ってあげたり、イランでは、自分の着替えるの服や予備の靴などを、バッグに詰めてプレゼントしたり。すごく喜んでくれたわ。」高峰さんの旅先の出会いは、「人との出会い」なのでした。

「没法子」は過去を引きずらない潔い生き方

最近の高峰さんは、「たくさんの人と交流したい」、「施設の事を知ってもらいたい」とブログに夢中です。「今日も、デジカメを持って出かけます。」と、益々楽しみの人生を邁進中です。

こんな前向きな高峰さんにも、4年間暮らした下関からこの地に移り住んだ日、「どうしてこんなところに来たんだろう？」と寂しさに駆られ落ち込んだことがありました。そんな時に里の玄関前に咲く、泰山木が目止まったのです。「雨に濡れて咲く白い美しい花は、自分を励ましているようだった。その時に、『ここで暮らそう』と気持ちを切り替えることができたの」と振り返ってくださいました。

「没法子（めいふあず、中国語）は高峰さんのモットーです。本来は、「しかたないよ」「諦める」という言葉ですが、「気持ちを切り替えて、早く決断すること大切」と高峰さん。どんなことがあっても過去を引きずらない潔い生き方を高峰さんから教えていただきました。これからも益々充実の人生を歩んで下さい！